

栃木県宇都宮市

道の駅うつのみやろまんちっく村について

まちづくり・新エネルギー対策特別委員会では、平成30年4月17日に「道の駅うつのみやろまんちっく村」の展開について行政視察を行いました。

本施設は、“人と地域と豊かな里山にふれあう道の駅”をテーマに、46ha（東京ドーム10個分）の広大な敷地に、農産物直売所や地物の食材が味わえる複数の飲食店、ブルワリー、乗馬体験、ドッグラン、体験農場、温泉やプールを備えた宿泊施設のある体験型ファームパークで、「農と食」によるおもてなしのほか、週末を中心に各世代が楽しめるイベントを実施しています。

宇都宮市では、昭和63年に農林公園構想がスタートし、平成8年に当初整備費148億7,200万円（内国庫補助金36億1,700万円）で「ろまんちっく村」をオープンしました。平成20年には、長引く景気の低迷や類似施設との競合、利用者ニーズの多様化など施設を取り巻く環境が変化する中で将来にわたって魅力のある公園として質の高いサービスを提供するため、優れた経営ノウハウや企画力、資金力などを備えた民間事業者による指定管理制度に踏み切り、指定期間10年で現在の指定管理者である株式会社ファーマーズ・フォレストが選定されました。また、平成23年には駐車場やトイレの24時間開放、大型駐車場スペース確保に伴う駐車場改修、物販機能の強化、案内看板を設置するなどして、道の駅への登録申請を行いました。大型犬、小型犬用のドッグランを設けることでリピーターも増加し、指定管理前の平成18年は88万5,849人だった来場者数が、指定管理10年目の平成28年には142万4,638人となり、過去最高を記録しています。

特筆すべきポイントは3つあり、まず1つ目は、しがらみのない企画運営です。県外出身者からなる事業者であるファーマーズ・フォレストは、停滞していた農林公園（ろまんちっく村）を体験型テーマパークにリニューアルしました。委託当初から徐々に飲食店や直売所を直営化し、従業員130名も直接雇用するなど、「ハコモノ整備よりも、地域の魅力を引き出し有機的に結び付けていく仕組みづくりを重視すべき」と、よそ者視点のしがらみのない自由な発想で地域の魅力を発信しました。

2つ目は、「地域商社」としての総合プロデュースです。道の駅ろまんちっく村の直売所のほかに、市内中心市街地の「宮カフェ」、東京スカイツリーの商業施設内「とちまる」といったアンテナショップを展開しました。通信販売カタログ「トチギフト」の発行や通販サイトの運営、県内の契約農家から農産物などを集荷する広域集配システムを独自に整備して、県内10カ所の直営店や首都圏のスーパーなど約200店舗に出荷し、多様で安定的な販路を確保しました。また、麦芽もホップも地元こだわったクラフトビールの開発、大谷採石場の低温水を利用した夏イチゴの栽培を行うなど、地域資源や魅力を商品化し、発信しています。

3つ目は、体験型と課題解決型の観光ツアーを充実させて地域課題を解決する特徴的な地域活性化モデルを発信していることです。ろまんちっく村では、タケノコ堀り、乗馬体

(まちづくり・新エネルギー対策特別委員会)

験など様々な体験コンテンツを用意しています。また、不法投棄が多く地域の負の遺産になっていた大谷採石場を整備し、採掘跡に水が溜まってできた「地底湖」を探検するツアーを開発したほか、周辺集落の課題を逆手に取った竹林の再生、林業の魅力を伝えるツアーも行っています。

ファーマーズ・フォレストはメディアを活用し、地域の人が自分の地域を自慢できる自立したまちづくりができるよう、多角的な発信とビジョンの共有に力を入れていると感じました。委託当初は、地域の方々との摩擦があったそうですが、市の職員と連携しながら、地域の人たちの話をしっかりと聞き、一緒に将来を思い描くということを丁寧に行うことにより、スクラップアンドビルドの結果、現在行っている仕組みがようやく回りはじめたという話が印象的であり、今回得た視点と様々な取り組みは大変参考になるものでした。



道の駅うつのみやろまんちっく村